

「男、突っ走る！」

第48回

第一稿

作・壽倉 雅

登場人物

木内 雅也 (20) 名古屋芸術専門学校2年生

木内 真保 (47) 雅也の母

眞榮田 浩平 (20) 名古屋芸術専門学校2年生
長井 夏美 (20) 名古屋芸術専門学校2年生

鈴木 貴広 (45) 名古屋芸術専門学校講師
藤堂 香 (55) 名古屋芸術専門学校講師

1 名古屋芸術専門学校・全景

2 同・4階・廊下

雅也がプリンターの前に立っている――
――何枚ものプリントが印刷されてくる。

3 同・同・402教室

書類の束を持った雅也が戻ってくると、
赤ペンを持って校正作業を始める。

4 同・1階・ロビー

イヤホンをつけた浩平が登校してくる。

5 同・同・402教室

校正作業を続けている雅也――ペンを
置いて、背中を伸ばすと、立ち上がっ
て出ていく。

6 同・同・廊下

雅也が出てくると、ベンチに座ってペ

ットボトルのお茶を飲み始める――エ

レベーターが開き、浩平が出てくる。

雅也「おつかれ」

浩平「早いね、うちー」

雅也「やるんがいろいろあるから」

浩平「成人式終わったばかりなのに、全然

落ち着かないな」

雅也「しょうがないよ。俺たちには、卒業進

級制作展の実行委員会って言う仕事がある

んだから」

浩平「今年は、随分良い感じにメンバー配置

できてるよな。営業リーダーがぐっち、広

報リーダーがあつぽん、総務リーダーがう

っちーなんだから」

雅也「その配置が良いのかどうか俺には分か

らないけど」

浩平「バランスの取れた人選だと思っぞ。う

っちーが総務っていうのも、それっぽい気

がするし。地元には本社のある業界の企業に

イベント宣伝するテレアポに使う原稿だっ

て、あれ、うちーが考えたんだろ」

雅也「まあね。過去の資料をもとに、再構成
しただけだけど」

浩平「そういう資料があるだけでもありがた
いもんだよ。アドリブで上手く話せる学生
だけじゃないんだし」

雅也「まあ、各部署で協力して連携すれば良
いんだよ。よくよく考えれば、去年はそう
いった連携が全然取れてなかった。だから、
空中分解とまではいかないけど、うまく実
行委員全体がまとまっていなかった気がする
し」

浩平「去年の状況を知ってるのは、うちー
とぐつちとやつすーぐらいか」

雅也「そうだね。でもまあ、去年のことを知
ってる人がいると、去年の改善点を直すこ
ともできるから」

浩平「まあ、それは言ってる」

雅也「成人式、どうだった？ 俺、実はまだ
余韻が結構残ってる」

浩平「俺、四次会まで行ったよ」

雅也「うちも四次会まであったらしいんだけど、体力持たなくて、三次会で帰ってきちゃった」

浩平「体力が持たないなんて、何か疲れたことでもあったのか？」

雅也「羽織袴だったから、朝早く呉服屋さんで着付けしてもらったし、中学の同窓会ではクラス幹事だから早めに会場に行って準備してたし、三次会の時は一緒に飲んでたクラスの子が酔いつぶれちゃって介抱してたから」

浩平「うちー、クラス幹事なのか？」

雅也「それがね、俺自分で立候補したわけじゃないんだよ」

浩平「勝手に決められてたってこと？」

雅也「当時、インフルエンザで休んでいた時期があっただよ。ちょうど三年生の終わりのぐらいに。友達の話じゃ、その時に勝手に決まったんじゃないかって」

浩平「へえ」

雅也「俺に何の許可もなしに、勝手に決められてびっくりしたよ。まあ、決められたからにはやるけどさ、他にもうちのクラスには生徒会長や学級代表ばかりやってる子もいるんだよ。わざわざ俺でなくたって、

そういう子が担当すれば良かったのにさ」

浩平「うちーならやってくれと思ったんじゃないのかな。現にうちーは、やっちやうわけだし」

雅也「まあねえ」

浩平「結構飲んだのか？」

雅也「ビールを乾杯の時に少し飲んで、後は梅酒のロックを少しずつ飲んだ」

浩平「日本酒とか焼酎は飲まなかったのか？」

雅也「食わず嫌いってわけじゃないけどさ、まだ飲める自信がなくてね。それに、多分そこまでお酒には強くないような気がして。だから、友達なんてテキーラのショットとか強いものバンバン飲むからすごいなと思

ったよ。まあ、それで酔いつぶれちゃった

子が何人もいたけど」

浩平「テキーラショットを何杯も飲んだら、

そりゃ潰れるわ」

雅也「三年生になったら、みんなで飲みに行

きたいね。もう全員二十歳越えるわけだし」

浩平「ああ、それ良いかもな。この辺なら、

居酒屋とか飲めそうなところたくさんある

し」

雅也「バーとか行ってみたい」

浩平「あれ、随分オシャレなこと言うじゃん。

うちー、マス酒飲んでそうなのに」

雅也「どんなイメージだよ。飲んだことない

わ。俺は、まだ梅酒のロックぐらいしか飲

めないって。ビールだって、この間の成人

式の時に初めて飲んだんだから」

浩平「二十歳になって、最初に飲んだお酒

は？」

雅也「確か、缶チューハイだったかな、リン

ゴ味の」

浩平「女子か」

雅也「何でだよ」

浩平「うちーは、マス酒だつて」

雅也「だからどんなイメージ持ってるんだよ」

浩平「いろんな酒飲めたほうが、意外とこの

学校では良いかもな」

雅也「どうして？」

浩平「映像科のメンバーは、みんな酒が強い

んだよ。大久保も福本も長井も加藤も」

雅也「マジか。そのメンバーと飲んだら、俺、

間違いなく潰されそうだな」

浩平「今のうちに、耐久性を鍛えたほうが良

いぞ」

雅也「酒飲む暇があったらね」

浩平「（苦笑して）今は、それどころじゃね

えか」

雅也「そうそう。そろそろ作業再開しよ」

浩平「俺もやるかな（と401教室に入って

いく）」

雅也、階段を上っていく。

7 同・5階・502教室

パソコンで作業している藤堂——雅也
が入ってくる。

雅也「お疲れ様です」

藤堂「お疲れ」

雅也「いらしてたんですか」

藤堂「一年生の合同文芸誌の状況管理をしよ
うと思っ
てね」

雅也「すいません。一年生のヘルプ、なか
かできなくて」

藤堂「でも、データ作成の時に、随分一年生
に丁寧に教えてくれたじゃない。マニユア
ルまで作ってくれてさ。よく資料作る時間
あつたわね」

雅也「ずっと学校に入り浸ってますから」

藤堂「感心するわ。いろんなことやってるの
に、何一つ辛そうな顔を見せないんだもの」

雅也「いやいや。結構友人たちの前では、弱
音吐いてますよ」

と、部屋の奥の本棚からいくつか文庫

本や雑誌をピックアップしていく。

藤堂「ねえ、ナミと最近連絡取り合ってる？」

雅也「（動揺を隠しつつ）どうしてですか？」

藤堂「このままだと、卒業単位が危なくて、

留年する可能性があるのよ。文章系の学級

委員同士で、うちーからナミに連絡取れ

ないかな？」

雅也「授業に顔出すことはたまにあるんです

けど、特に残って作業することもなく、そ

のまま帰っちゃいますし、僕のLINEな

んてここ一年近く全く返信ありませんから

ね」

藤堂「そう……」

雅也「一年生の頃は良かったのに、燃え尽き

症候群になっちゃったんですかね」

藤堂「無理に頑張ってたのかな……」

雅也「こっちが心配したって、向こうは何と

も思っちゃいないんですよ。授業中だって、

ほとんど目も合わせないんですから」

藤堂「そう……。二人とも良いコンビだと思

ったんだけどな」

雅也「後はナミがどう思うかですよ。単位が足りないことは、成績表を見れば分かることですし、それで危機感を抱くようになってからそのうち学校にもちゃんと来るようになるでしょ。僕が心配したところで、どうにでもなるわけじゃないんですから」

難しい顔の藤堂。

N「一年生の秋に行った海外研修先のアメリカで告白をされた後、特に進展もないまま、ナミが学校に来なくなったことで、僕とナミの関係性は自然消滅となりました。ナミも学校に来る回数が減り、僕も様々なことに追われながらの学校生活だったので、二人の時間を作ることは現実的には不可能だったのかもしれない」

8 学校前の道（夜）

雅也が信号で待っている——夏美が後

ろからやってくると、

夏美「うっちー」

雅也「（振り返り）なつ姐さん」

夏美「今日も一日学校にいたね」

雅也「時間がいくらあっても足りないんだよね。今日も朝から作業してたら、あつという間に一日終わっちゃって」

夏美「分かるよ、その気持ち」

雅也「学校で泊まれたら良いのに。それなら、ずっと作業できるもん。わざわざ一時間半近くかけて家に帰ることもないしね」

夏美「確か、東京の学校は二十四時間学校開いてるらしいよ」

雅也「良いなあ。同じ学校法人が運営してるのに、この違いは何だろうね」

横断歩道の信号が緑に変わり、歩いていく雅也と夏美。

夏美「まあ、それぞれの学校のやり方なんでしよう」

雅也「この近くの漫喫に泊まるのももったい

ないしね。時間を有効的に活用しようと思
つても、なかなか上手くいかなくて」

夏美「まあうちーは、抱えてるものが多
すぎるからね。分身がいないと困るんじゃな
い？」

雅也「あと、三人ぐらい分身がほしい」

夏美「それは作りすぎだって」

雅也「だって、それぞれに分けて分身に仕事
分けたいぐらいだもん」

夏美「ひと段落したら、みんなでご飯でも行
こうか」

雅也「ああ、そういえば今日、眞榮田とそん
な話したわ。新学期になったら、みんな同
期は二十歳越えるから、お酒飲めるって」

夏美「確かに、私たちまだ飲み会っていうの
したことがなかったね」

雅也「したくても、そんな余裕ないもんね」

夏美「春休みになったら、みんなで飲みに行
こう」

雅也「なつ姐さんは、お酒強いの？」

夏美「まあ、人並みには」

雅也「やっぱり、耐えられるようにしとかなきゃな」

夏美「うっちー弱いの？」

雅也「まだ、がつつり飲んだことないから」

夏美「じゃあ、潰してやろ」

雅也「ちよつと、なつ姐さん」

笑い合う雅也と夏美。

9

木内家・居間（夜）

食事がテーブルに置かれている——雅也と真保が帰宅する。

雅也、テーブルのおかずを電子レンジに入れて温める——真保、茶碗を持って炊飯器の蓋を開ける。雅也、それへ、

雅也「あ、今日米いらない」

真保「おかずだけで良いの？」

雅也「あんまりお腹空いてない」

真保「後期の授業、終わったんでしょ。まだそんなにやることあるの？」

雅也「本の編集作業もあるし、卒業進級制作展の実行委員会の会議だってあるの。授業受けるだけで終わりってわけじゃないんだから」

真保「無理するんじゃないわよ。身体壊したら元も子もないんだから」

雅也「はいはい、分かっています」

真保「明日も朝、早いの？」

雅也「いつもの七時過ぎの電車に乗る」

真保「じゃ、早めに寝なさいよ。母さん、先に寝るからね」

雅也「うん、おやすみ」

出ていく真保——雅也、レンジからおかずを取り出すと、椅子に座る。

雅也「いただきます（と食べ始める）」

10 名古屋芸術専門学校・4階・403教室

ゲラのチェックをしている鈴木——傍らに雅也。

鈴木「全体的に大分良くなったな。天地の余白も良いし、これなら製本したときのノドと小口も問題ないだろ」

雅也「ありがとうございます」

鈴木「最終確認まで、手を抜くなよ」

雅也「はい。あの……鈴木先生、一つご相談があるんですけど」

鈴木「どうした？」

雅也「春休みに開催される、ポトフオリオ集中講座、僕も受講して良いですか？」

鈴木「もちろん。ポトフオリオ、作ってるのか？」

雅也「それなんですけど、文章系のポトフオリオって何をどう作って良いのかなと思ってる。文芸誌みたいに本にしたところで、結局全部その場で読んでもらうのは現実的ではありませんし、それならばみんなが作ってるような、授業課題や自主制作をまとめたもののほうが良いかなとは思ってるんですけど、具体的にどういうふうにまとめ

たら良いのかなって……」

鈴木「文章系の学生がポートフォリオ集中講座に参加するなんて、前例がないし、俺も文章系の学生がポートフォリオを作ってるところなんて、見たことないからな」

雅也「そこなんですよ。参考にしようと思っても、先輩たちの例がないんです。まあ、前例がないなら作っちゃえって言うのが、僕の信念ではあるんですけど」

鈴木「どんな内容はさておき、ポートフォリオって言うのは、個性をどれだけ表現できるかなんだ。ただ透明なクリアファイルに、プリントした作品をファイリングすれば良いってわけじゃない。それに、人がものを見る導線を意識したうえでの見せ方も大事になるんだ。ポートフォリオに何を入れるのか、どういう見せ方にするのかっていう構成やアイデアを、まずは考えてみたらどうだ？」

雅也「（笑顔になって）はい、やってみます」

11 同・同・廊下

菓子パンを食べながら雅也、浩平、夏美が話している。

浩平「うちーも作るの、ポートフォリオ？」

雅也「うん」

夏美「けど、急にどうして？」

雅也「この間の成人式で、いろんな子と話した子って言うのは、当然もう社会人二年目なわけじゃん。ということは、俺たちだつてこれから就活が始まるわけでしょ。進路の方向性を、そろそろ決めなきゃと思つてね。小説やシナリオや漫画専攻は、就職というよりはデビューっていう選択肢だけどさ、本格的にデビュー活動をするんなら、ポートフォリオも必要になってくるんじゃないかと思つて」

夏美「なるほどね」

浩平「確かにうちーの場合は、俺たち以上

に作品が重視されるもんな。その中で、ポ
ートフォリオとしてちゃんとまとめてあつ
たほうが、良いかもしれないな」

雅也「だから、前例のない、文章系のポート
フォリオを作ろうかなと思って。その時は、
ぜひ意見ください」

浩平「任せろ」

夏美「私も」

雅也「ありがとう」

浩平「俺もさ、インターンでテレビ局のバイ
トを始めようと思ってるんだよ」

雅也「とうとう、眞榮田もそこまで来たか」

浩平「テレビ局の下請けの制作会社なんだけ
ど、そこからテレビ局への出向って言う形
で、ADをやろうかなって」

雅也「良いと思う」

夏美「私も、そろそろCG制作をやってる会
社、いろいろピックアップしようかな」

浩平「キャリアセンターからも求人情報がメ
ールで来るだろうけど、やっぱり自分で探

すのが大事だよな」

夏美「うん」

雅也「俺も、どこにチャンスが落ちてるか分からないから、脚本家の募集とか、制作会社、いろいろ調べようかな」

浩平「東京？ 愛知？」

雅也「どこでもだよ。チャンスがあるなら、地域なんて問わない。脚本家になるためだもん」

浩平「イベントが終わったら、ゆっくり休む間もなく、今度は就職やデビューへの活動だな」

夏美「ああ、ゆっくり休みたい」
苦笑している雅也。

12 同・全景（数日後）

13 同・5階・502教室

詰まれた段ボール箱を乗せた台車を押して入ってくる雅也——段ボール箱を

下ろすと、封を開ける。

『17年目の秘密 作・木内雅也』の
シナリオ本と、『栄新名所図絵』の雑
誌の束が入っている。

感慨深く手に取って、中身を見る雅也。

N 「長い時間と労力をかけて制作したシナリオ本と、編集長を務めた歴史雑誌が無事に完成をしました。卒業進級制作展の実行委員会の会議は、前日までに何度も開催され、総務リーダーである僕は、毎回議事録作成という業務に追われていました。そしてそのイベントは、ついに明日の開催を待つま
でになったのでした」

つづく